

「マーケットの浅読み・深読み」

発行・編集:FXニュースレター

執筆担当:斎藤登美夫



◆◆◆ No.0659 ◆◆◆

21/10/27

【ドル/円はドル高基調続く、年末までの見通しは!?】

ドル/円は 20 日に 114.69 円まで値を上げ、2017 年 11 月以来の高値を示現した。年初来ここまでの動きを大雑把に言えば「年初安で寄り付き後、一貫した右肩上がり」で、このまま年末に掛けてドルの続伸を見込む向きも少なくない。つまり、今年が 2012 年や 2013 年のような「年初安・年末高」で終わる可能性も否定できないようだ。

そこで、今回の当レターでは今年も残り 2 ヶ月ほどとなるなか、年末に掛けての相場見通しについて、3 つの観点から以下でレポートしてみたい。

<< テクニカル①:ドル安サイクル >>

3 月 24 日付の当レターで、「1 月 6 日安値 102.60 円が『短期波動』底値の可能性」としたうえで、次の短期サイクルボトムを「2021 年の年末から 2022 年 1-3 月」とレポートした。

詳細はバックナンバーを当たってほしいが、これは前述した短期波動が 10-15 ヶ月周期で訪れることが背景。2021 年 1 月からの 10-15 ヶ月後は、ザックリ「2021 年の年末から 2022 年 1-3 月」となることによる。

仮に、先で指摘した次のサイクルボトム見通しが正しいとすれば、足もとのドル高傾向もジワリと終盤へと差し掛かっている感を否めない。

しかし、今年の年末あたりが次回ボトムであればともかく、最長周期 15 ヶ月であるならばボトムは来年 3 月で、だとすると年内いっぱいから来年 1 月ぐらいまではドル高・円安が続く可能性もある。無条件のイケイケドンドンで上値を追いかけていくことはリスクが大きいですが、それでもまだ上値追いの余地は残っており、注意しながらのドル買いが奏功する地合いがしばらく続きそうだ。

<< テクニカル②:年間変動率 >>

13 日付の当レターでも報じたように、ドル/円の過去の平均年間変動幅は 17.75 円、同変動率は 15.87%。対して、今年はなかなか頑張っているものの、それでも前者は 12.10 円、後者は 11.74%にとどまっている。過去の平均変動率にまだ遠く及ばない。

では仮に、今年のドル/円がこの先も活発な相場変動をたどり、過去平均の 15.87%程度の年間変動をたどったとすれば、ドルの上値はいったいどの程度になるのだろう。

単純計算では 119 円程度、場合によっては 120 円に迫る局面があっても不思議はなく、まだまだ大きなドルの上昇余地を残していると言えそうだ。もちろん、飽くまで過去の経験則を単純に適応させただけ、「大いなる期待感にともなう予想」だということは重々承知している。がしかし、残り 2 ヶ月に大きな波乱を起こす危険性も一抹ある気がしている。

<< 需給要因その他 >>

通常、年末に向けての需給要因はタイトになることが多い。理由は幾つかあるのだが、最大のものはというと、いわゆる「リパトリエーション」。つまり、本国への資金還流の動きで、決算期末などにともない企業が海外で挙げた利益を本国に送金したり、海外に投資していた資金を本国に引き揚げたりする事象のことを言う。

加えて、今年については、ロイターなどが報じているように、大手生保の外貨投資意欲が強いことも無視できない。たとえば、住友生命の下期外債投資スタンスについて「長引く低金利環境でのリターン確保を目指し、為替リスクをヘッジしないオープン外債を数千億円規模で積み増す」と指摘していた。

さらに、先日の日経新聞でも取り上げられていた「運用資産のほとんどを海外資産に振り向ける」とされる今年度中に設立される 10 兆円規模の大学ファンドも円安要因となりかねない。うえ、足もとの原油高にとまあ決済通貨のドル買い負担増、そして昨年 3 月話題となった「大手邦銀の外貨資金繰り」に対する不安も敢えて指摘すればドル高・円安要因だ。

単純な「日米金利差うんぬん」といった投機ファクターだけでなく、広義の需給要因から見ても年末に向け

